

主体的で対話的な表現・創作活動の実現に向けた実践事例 ～ダンスコンクールへの参加の取組を通して～

松本 拓也（岡山大学教育学部附属小学校）

1. はじめに

近年、小・中学校の体育授業を前提としたダンスコンクールが開催されている。こうしたイベント等への参加は、自己表現の場として認知されつつも、逼迫する教育課程を背景に学校の実態によっては必ずしも積極的に受け止められないことがある。その理由の一つとして、ダンス教育^{注1)}が育む汎用的な力が明確にイメージできないことが考えられる。体育授業とイベントや行事との関連という観点から、どのような資質・能力が形成されるかを明らかにすることで、保護者や教育現場の理解を得やすくなり、ダンス教育がより活性化すると思われる。

そこで本研究では、全学年で表現運動の単元学習を実施しており、さらにその学習経験をもとに自主的な課外活動としてダンスの全国コンクール^{注2)}に継続的な参加を行なっているA小学校の取り組みを事例として、活動を通して形成される資質・能力の可能性を質的調査アプローチによって明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査実施期間

2017年度から2019年度の10月から12月

(2) 調査対象

<A小学校>2017年度：3年生47名、4年生48名、5年生18名、6年生15名。(合計：128名)
2018年度：4年生27名、5年生30名、6年生20名。(合計：77名) 2019年度：4年生26名、5年生35名、6年生17名。(合計：78名)

(3) 指導者 筆者を含むA小学校教員2名

(4) 指導形態 体育科の教員2名の交代制

(5) 調査方法

2017年度から2019年度までの3年間連続して参加した29名の児童を抽出し、自由記述の質問紙調査を行い、KJ法を手段として記述内容を整理・

分析した。なお、活動時の記録映像及び調査対象の児童へのインフォーマルインタビューデータを解釈時の参照データに用いた。

(6) 質問紙調査の項目

| |
|--|
| Q1 クラス 名前 チーム名 |
| Q2 コンクールに挑戦し続けた理由は何か |
| Q3 ダンスあるいは運動系の習い事はしているか |
| Q3-1 「はい」と答えた人は何を習っているか |
| Q3-2 期間はどれくらいか |
| Q4 今まで経験してきた表現運動の単元学習(体育授業)ではどんな力を身に付けられたか |
| Q5 運動会に向けた表現の学習ではどんな力を身に付けられたか |
| Q6 コンクールに向けた練習を通して、どんな力を身に付けられたか |
| Q7 体育授業で身に付けた力や学んだことは運動会やコンクールに活かしていると思うか |
| Q7-1 活かしていると答えた人は、どんな力が活かされたと思うのか |
| Q8 自分たちのアイデアで創り上げられたという実感はあるか |
| Q8-1 その理由は何か |

(7) 創作にあてた課外活動時間

15分間の休憩時間を自主的に創作する時間として位置付けた。予選へ向けた活動時間数の平均は、中学年で約6時間、高学年で約5時間、決勝大会に向けた活動時間数の平均は、中学年で約8.5時間、高学年で約5時間であった。

3. 取組の実際

主体的で対話的な表現・創作活動が実現するように、主に下記の4つの視点から指導方法を工夫した。

(1) 学びの文脈づくり

体育授業で学習した即興表現を運動会作品の一部やコンクール作品の一部に取り入れるように設定した。また、校内でコンクール作品のお披露目を設定し、年間の表現活動に連続性をもたせた。

(2) 児童による PDCA サイクル

短期間のサイクルで PDCA を進めていくよう支援した。これらのサイクルの中で、表したいイメージ・リズム・動き、練習内容、ポジションの最終意思決定は児童に委ねた。

(3) 動き見付けと構成作り

大人数のダンス作品に必要な「複数人での動きのアイデア」「移動の仕方」「空間の構成」等を考え出すことは、小学校段階の児童にとっては難しい。そこで、「持ち寄り 8 カウント」により表したい動きを組み合わせやすくしたり、「アイデアスケッチ」や「構成ボード」を提示したりした。

(4) 創作活動中における教師のかかわり

作品がある程度まとまってきたタイミングで、映像を見せながら成果や課題への気づきを促した。中学年には、気づいた内容を表出できるように促すなど、対話が成立するようにかかわった。また、異なるチーム同士で見せ合う時間を確保したり、立ち位置が替わる際の移動の仕方について例示したりした。

4. 質問紙調査結果

3年間参加した児童を対象とした質問紙調査で、体育授業と自主的な課外活動の関連においてどのような資質・能力を自覚しているのかについて KJ法を用いて分析した。

まず、「今まで経験してきた表現運動の単元学習（体育授業）ではどんな力を身に付けられたか」の質問については、①変化をつけるメリハリ力②全身を使って誇張する力③表したいイメージにふさわしい動きを見付ける力と続いた。そして、「体育授業で身に付けた力や学んだことは運動会やコンクールに活かしていると思うか」の質問については、9割の児童が「活かしている」と答えた。

「活かしていると答えた人は、どんな力が活かされたと思うのか」という質問については、①全身を

使って誇張する力②変化をつけるメリハリ力③友達と協働する力と続いた。これら



の結果から、体育授業と自主的な課外活動の関連において児童に自覚されている資質・能力は、「全身を使って誇張する力」と「変化をつけるメリハリ力」、続いて「友達と協働する力」であった。

5. 考察及びまとめ

本実践では、A 小学校の取り組みを事例とし、活動を通して形成される資質・能力の可能性を質的調査アプローチによって明らかにすることを目的とした。質問紙調査を通して、体育授業の学習内容を意味する言葉や事柄が抽出された。コンクールへの取組は、授業で身に付けた資質・能力のより確かな自覚につながったのではないかと考えられる。また、映像データの児童の姿の変容から【汎用的な力】の抽出を試みた。「団結する感じを表すには真ん中に集まった方がいいね」「こうやって動いてみたら元気な感じが出せるよ」等と言語だけでなく身振りや絵等を使いながら必死で伝え合う姿が見られた【対人コミュニケーション能力】。特に高学年において、リーダー以外に具体的な役割を自分達で考え出したり【役割創出力】、任された役割をやり遂げようとしたりする姿【役割完遂力】が見られた。指先まで全身を使って大げさにしたりメリハリをつけて変化させたりすることを意図して踊る姿も多く見られた【技術力・創作力】。

以上から、本実践事例の活動を通して形成された資質・能力について、【技術力・創作力】【役割創出力】【役割完遂力】【対人コミュニケーション能力】の可能性が見出された。自分たちで作品を作り上げて応募するという切迫感のある課題設定とともに、体育授業で重ねた経験の活用を促すといった指導方法の工夫が、これらの資質・能力の発揮に結びついたと考えられる。資質・能力のカテゴリーの整理を今後の課題としたい。

注1) ここでは、小学校の表現運動の単元学習と行事やイベント等を関連させた取組の総体としての教育活動と考える。

注2) 全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール実行委員会主催のダンスの全国大会。リズムダンスを通じて豊かな人間性の育成や体力の向上を目的とし、ダンスの優劣を競う大会ではなく、児童間の結びつきを強め、学校生活を豊かにすることを趣旨とし、2019年で第7回の開催となる。小学生・中学生・特別支援学級部門の各部門で規定曲と自由曲によるエントリー。映像審査による予選と全国決勝大会（東京都）で実施されている。